

馬籠宿

成瀬 敏郎

昨年の2月、北陸への調査旅行の帰途、思うところあって松本から塩尻に抜け、中央線に乗換えて恵那市で下車、一泊して翌朝、馬籠宿を訪れた。馬籠宿は「木曾路はすべて山の中である」という出だしで始まる島崎藤村の不朽の名作「夜明け前」の舞台になったところである。ここを通る中山道にも江戸から明治へと移り変わる激動の時代が訪れた。幕府の無力化、明治という新しい時代の到来が、この宿場町の人々にも、いやおうなく変化を強いた時代に生きた主人公の気持ちが最近になって理解できることが多くなった。

1963年、私が大学3年生のとき、地形学の授業で地学団体研究会「日本地形論上」が教科書として使われた。この本は貝塚爽平・太田陽子先生など当時の中堅地形学者によって執筆されたものである。授業担当は、地図や自然堤防の研究で知られた籠瀬良明先生であった。私は地形学を本格的に勉強したいと思っていたので、例えば山地の地形をどのように調べればその発達史がわかるのかについて、この本に非常にわかりやすく書かれていた。

とくに山地地形の章には、とても印象的な文があった。それが「夜明け前」の冒頭の文章である。馬籠宿は急峻な木曾山脈とその南西にひろがる低平な恵那山地の接点にあり、一大地形変換点にあたる。当時、勉強するすべてのものが私に新鮮な驚きと感動を与えてくれたが、山地の形成について書かれている内容もじつに感動的であった。そのため、いつか馬籠宿を訪れ、木曾山脈と恵那山地の地形をこの目で確かめたい衝動にかられた。それがちょうど40年後に実現したことになる。

翌朝、馬籠宿に出かけた。あいにくの雨と強い風、天候が悪いうえに早朝ということもあって人一人いなかった。見晴らしのよい場所に立つと、眼前には霧につつまれた木曾山脈とその南西に低平な恵那山地が墨絵のように広がっていた。私は大学に入学して、偶然にも自然地理学という学問に出会い、これを研究できる仕事に就くことができた。これも地理学を問わず実に多くの先生方の暖かい指導をいただいたおかげである。山地発達史の一端をこの目で見たという充実感とともに、教えを受けた多くの先生方を思い出しながら雨にぬれた中山道の石畳道を歩いて恵那まで下った。

今年も2編の修士論文と4編の卒業論文が提出された。自然地理学が4編、人文地理学が2編である。どれもなかなかの力作である。これらの論文を読みながら、論文を提出した学生たちが論文作成上でどんな書物を読んで感動したのだろうか。この論文を作成したことがこれからの人生にどう活かされるのであろうか。将来、もし語り合える機会があればぜひその話を聞きたいものである。地理学を学んだ先輩の一人として、地理学を学び、論文を書いたことを生涯の糧として、これからもたゆまずに努力してほしいと切に願うところである。